

立山町文化財調査報告書 第24冊

五郎丸遺跡

——立山町第2五郎丸企業団地造成事業に伴う発掘調査——

1995年

立山町教育委員会

序

文化財は、祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であると言えましょう。

このたび調査の行われた五郎丸遺跡は、鎌倉時代に曾我五郎が住んだと
いう開村伝承がありましたが、その実態は不明でした。

今回の調査では、掘立柱建物や古代・中世の土器が数多く出土して、古
くから開けた集落である事が確認され、また、常願寺川扇状地扇端部にお
ける古代・中世の開発状況を知るための貴重な資料を得ることができました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役
立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをは
じめ、調査に御協力いただいた立山町と地元や諸方の皆様に衷心より感謝
申し上げます。

1995年3月

立山町教育委員会

教育長 金川 正盛

例　　言

1. 本書は立山町第2五郎丸企業団地の造成に先立つ、富山县中新川郡立山町五郎丸遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は立山町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成6年5月13日～平成6年6月30日までの延27日間に行った。その後、報告書作成は平成7年3月31日まで行った。発掘面積は約800m²である。
4. 調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛が総括した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と同学芸員柴垣智子である。
6. 調査にあたり、富山县教育委員会文化課・富山县埋蔵文化財センターから有益な御教示をいただいた。なお古代及び中世の土師器については宇野隆夫氏（富山大学教授）に、石器の石材については山本正敏氏（富山县埋蔵文化財センター）に御教示をいただいた。記して謝意を表します。
7. 遺物の注記は「TGR」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。
8. 遺物整理・実測・製図は三鍋・柴垣が中心となり、鈴木和子・長谷川幸志（富山大学大学院生）、大野淳也・尾野寺克実・武田昌明・鶴松普・野中由希子・福海貴子・松原和也（富山大学学生）が協力した。
9. 本書の編集・執筆は三鍋・柴垣が担当した。

目　　次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	1
II 調査に至る経緯.....	1
III 調査概要.....	4
1. 立地と層序.....	4
2. 遺 情.....	5
3. 遺 物.....	5
IV 調査成果.....	19
参考文献.....	20
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 調査区区割図	3
第3図 調査区全体図	折り込み
第4図 遺構実測図	4
第5図 遺物実測図	8
第6図 遺物実測図	9
第7図 遺物実測図	10
第8図 遺物実測図	11
第9図 遺物実測図	12
第10図 遺物実測図	13
第11図 遺物実測図	14
第12図 遺物実測図	16
第13図 遺物実測図	17
第14図 遺物実測図	18

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真（1）昭和63年撮影
図版2	遺跡周辺航空写真（2）昭和41年撮影
図版3	1. 調査区全景（東から） 2. 調査区全景（南から） 3. 建物-01（南から） 4. 柱穴4（南から）
図版4	遺物写真
図版5	遺物写真
図版6	遺物写真
図版7	遺物写真
図版8	遺物写真
図版9	遺物写真
図版10	遺物写真
図版11	遺物写真
図版12	遺物写真
図版13	遺物写真

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約21km、面積は約308km²である。

地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。

標高400m以下は暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに統いて標高600m～700mまでは暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の生育帯で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

今回調査を行った五郎丸遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地の扇端部にあたる。遺跡は、現在の五郎丸集落とその周辺を含み、高野川左岸の微高地上に位置する。

周辺には縄文時代から中・近世に至るまで、ほぼ切れ目なく遺跡が存在する。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った遺跡に関連のあるものとしては、曾我遺跡（縄文）、利田横枕遺跡・日本遺跡・鉢ノ木I遺跡・横沢I遺跡（縄文～近世）、横沢II遺跡（縄文・古代～近世）、利田堀田遺跡・利田高見遺跡（古代～中世）、総曲輪遺跡（古代～近世）などがあげられる。

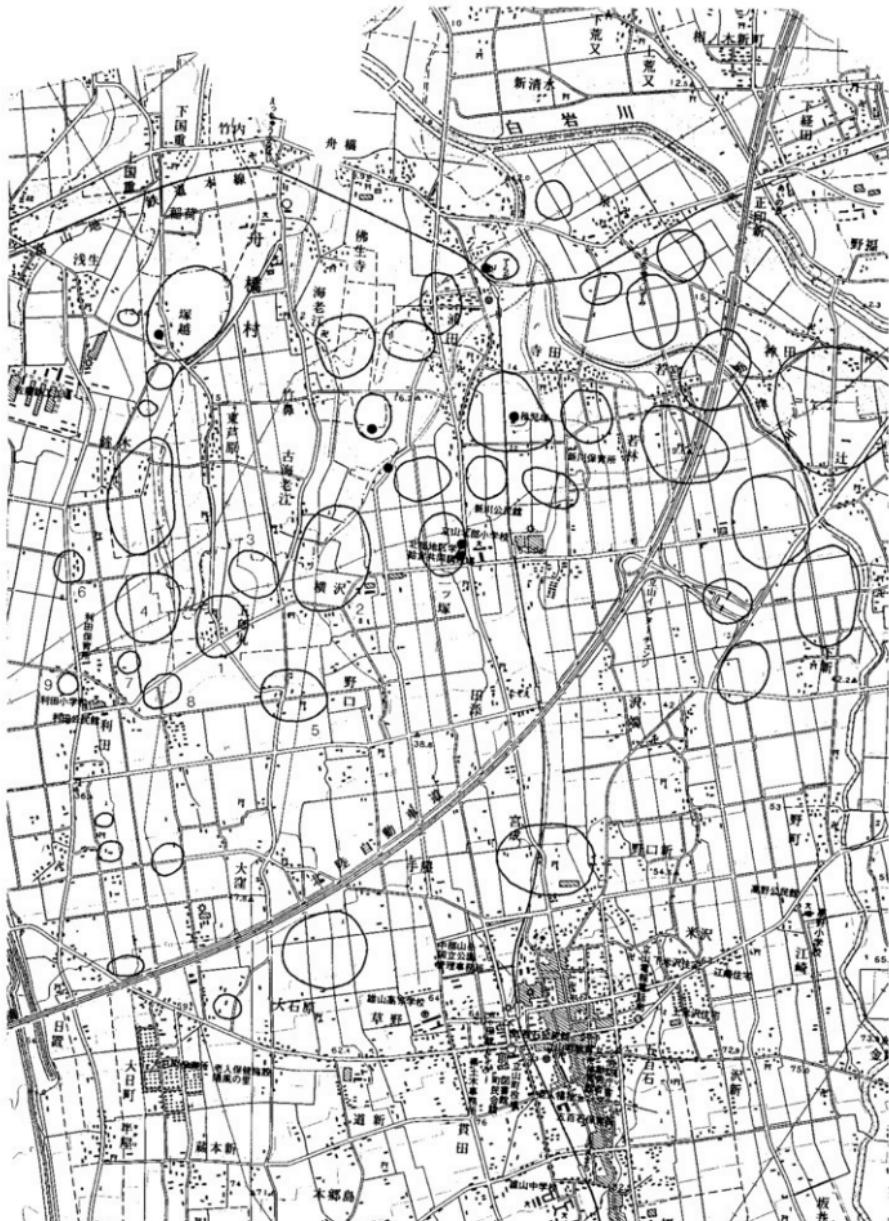
II 調査に至る経緯

遺跡は、以前から多くの縄文土器が採集されており、「立山町史」には五郎丸地区での遺物の散布状況が記載されている。

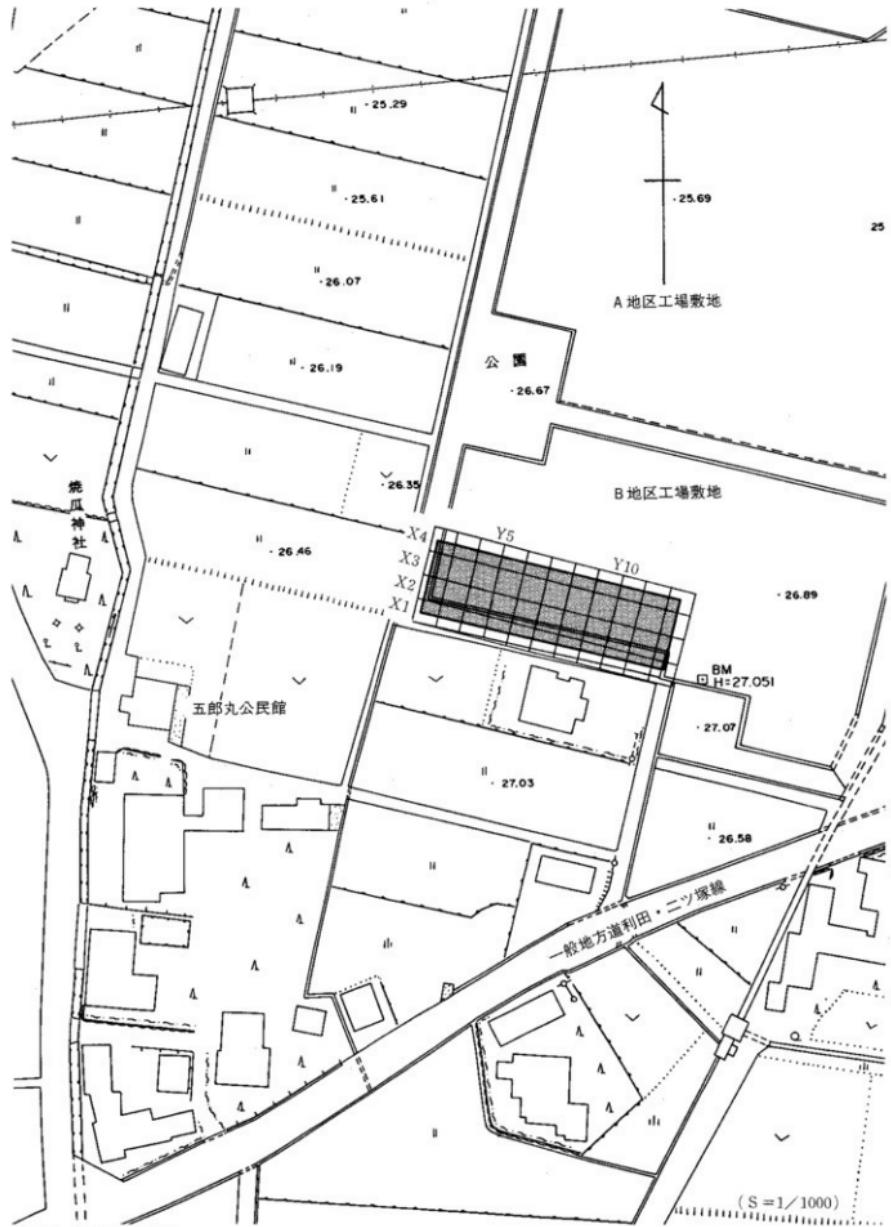
平成4年度、第2五郎丸企業団地造成の申請を受けて立山町教育委員会が試掘調査を行った。試掘調査では、河跡や河沿いの柱穴などの遺構・遺物を多数検出した。

この結果をふまえ、立山町教育委員と立山町が協議・調整を行い、造成予定地南側区画内の建物にかかる部分を対象として、記録保存調査を実施することとなった。

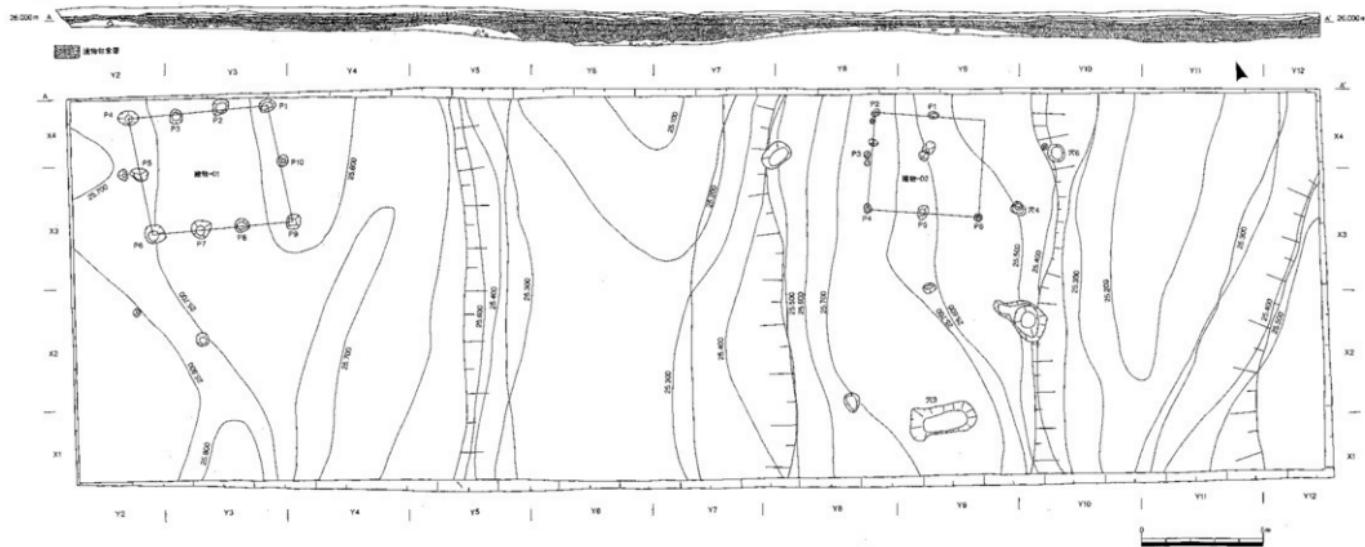
発掘調査は、平成6年5月13日から6月30日の延27日間にわたって実施された。調査面積は約800m²である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区区割図



第1图 测井剖面图

III 調査概要

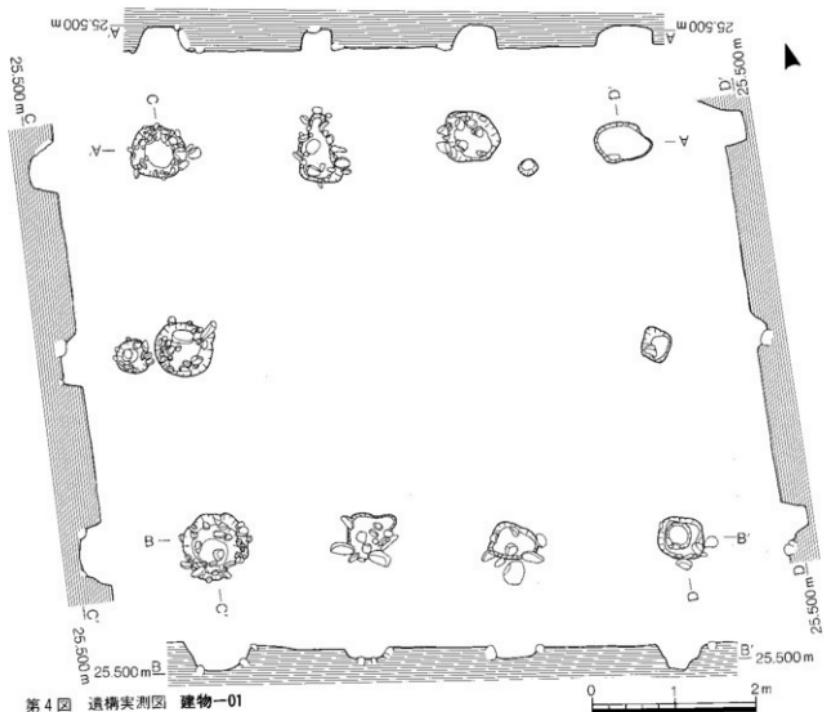
1. 立地と層序 (第2・3図)

五郎丸遺跡は、富山地方鉄道越中船橋駅の南2km、立山町五郎丸に所在する。一帯は、常願寺川扇状地の末端部湧水地帯にある。遺跡の周辺一帯には高野川・柄津川などの中小河川が流入して、三角州・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。

遺跡は高野川左岸の小支谷によって開削された微高地上に立地する。遺跡の規模は、昭和62年に実施された分布調査で南北310m、東西290mにわたって広がっていることが確認されており、標高は27m前後である。調査対象地区は水田として利用されていた。

層序は基本的に上から盛土（擾乱）、黄褐色土、灰褐色土、茶褐色土、黒茶褐色土、黒褐色土、礫層の順である。うち茶褐色土、黒茶褐色土、黒褐色土から遺物が出土しており、この3層が遺物包含層である。流路内の層序は黒褐色土の下に暗黒茶褐色土、黒褐色土下層、黄褐色沙層、堆山の順である。

遺物の出土状態は、遺構から良好な状態で検出し得たものは少なく、包含層からの出土が多い。



第4図 遺構実測図 建物-01

2. 遺構（第3・4図）

建物-01

調査区の北西隅で、2間×3間の掘立柱建物を検出した。建物方位は、N-75°-Wをさす。柱間寸法は、東西が約1.9m、南北が約2.5mで、平面形は菱形に歪んでいる。柱掘立は、径45~65cmの隅丸方形、円形、楕円形、不整形をなし、深さは15~35cmを測る。なお、P 6とP 9は柱痕が残る。

遺物はP 4から須恵器壺の体部破片1点（第8図57）が出土しており、時期は8世紀代と考えられる。

建物-02

調査区の北端、流路1と流路2に挟まれた微高地上で、2間×2間の掘立柱建物を検出した。建物方位は、東西柱列でるとN-64°-Wをさす。柱間寸法は、東西が2.4m、南北は北から1.8m、2.3mである。柱掘方は、径30~65cmの隅丸方形、円形、楕円形をなし、深さは10~20cmを測る。

流路跡

調査区の東側と中央部分で検出した。東側のものを流路1、中央のものを流路2とする。地山からの深さはともに50cm~60cm、幅は流路1が8~12m、流路2が約13mである。

穴

穴は掘立柱建物の柱穴以外に15個検出した。

遺物は、穴4から珠洲焼の擂鉢（第12図第134・第13図139）と八尾焼の臺底部（第13図143）、建物-01・P 4から須恵器壺（第8図57）、建物-02・P 4から土師器皿（第10図106）が出土している。

3. 遺物（第5~14図）

(1) 縄文時代の遺物（第5図6~9）

縄文土器・石器があるが、量的にはごく少ない。

土器（第5図1~5）

すべて遺物包含層からの出土である。

1は粗製の深鉢で、全面に縄文を斜位に施し、内面には炭化物が付着する。

2も粗製の深鉢で、口縁部には斜位の、胴部には縦位の縄文を施す。

3は深鉢の胴部破片で、二条の横位平行沈線上面に連続波状沈線を施し、沈線下には縦位の縄文を施す。内面には炭化物が付着する。中屋式期に比定できる土器である。

4も深鉢の胴部破片で、二条の横位平行沈線上面に入組文の一部と思われる文様を施し、沈線下には縦位の縄文を施す。御経塚式後半から中屋式期前半にかけてのものと考えられる。

5は深鉢の底部であり、成形時に粘土を接合した状況が観察できる。

石器（第5図）

打製石斧・石錐・敲石・擦石などがある。

打製石斧（第5図6）

X 2・Y 2から出土したもので、平面は短冊形を呈し、基部が欠損している。残存長12.1cm、全幅6.8cm、重量340.8gを測る。石材は砂岩で、横長削片を横位に用い、主として側縁部に二次加工を施す。

石錐（第5図8）

穴2から出土したもので、全長5.4cm、全幅4.7cm、重量61.5gを測る。石材は泥岩である。自然礫を素材とした礫石錐であり、長軸上端に抉りを入れるための剥離を施す。

蔽石・擦石（第5図7・9）

7は蔽石で、試掘時に出土した。全長13.4cm、全幅5.5cm、重量496.9gを測る。石材は砂岩で、長楕円形の自然縫を用い、周囲に敲打痕をもつ。

9は蔽石で、X2・Y5から出土した。全長10.3cm、全幅7.6cm、重量372.5gを測る。石材は砂岩である。扁平な楕円形縫の平面を利用する。

（2）古代の遺物（第6～9図）

土器の調整技法には、ハケメ調整・ヘラミガキ調整・ナデ調整・ヘラケズリ調整などがあるが、以下の記述では「調整」を省略し、単に「ハケメ」・「ヘラミガキ」・「ナデ」・・・と記す。なお、回転を用いるナデを「ヨコナデ」、ヨコナデよりも高速の回転を用いるナデを「ロクロナデ」、高速の回転を用いるヘラケズリを「ロクロケズリ」とする。

須恵器（第6図～第8図）

杯蓋・杯・碗・壺・甌などがある。

杯蓋（第6図10～23）

13は試掘時の出土品、17は表面採集品、その他は遺物包含層からの出土品である。つまみの残っているものが2点、縁端部の破片が12点ある。

10・11はつまみ付きの蓋で、ともに頂部外面にロクロケズリを、内面にロクロナデを施す。11の縁端部は外面に自然縫がかかり、縁端の断面は三角形を呈する。12～23は杯蓋の縁端部を含む破片である。12はつまみが欠損しており、頂部にロクロケズリを行ったのち全面にロクロナデを施す。縁端の断面は三角で、内面に明瞭な棱をもたない。13は頂部肩に帯状のロクロケズリを施し、縁端は丸くおさめる。14はつまみが欠損しており、頂部を回転ヘラ切りしたのち、全面にロクロナデを施す。縁端の断面は三角である。15は頂部にロクロケズリを施し、縁端の断面は三角である。16は内外面ともに全面ロクロナデを施す。縁端の断面は三角である。縁端部の外側に自然縫がかかる。17は頂部と肩にロクロケズリを施す。18は頂部をロクロナデ、肩にロクロケズリを帯状に施し、縁端の断面は丸みを帯びた三角である。19は頂部から肩にかけてロクロケズリを施し、内面と縁端部外側に自然縫がかかる。20は縁端の断面は三角で、外側は摩滅が激しく調整は不明で、内面も使用により磨耗している。21は頂部に回転糸切り、肩にロクロケズリを施し、縁端の断面は三角である。22は頂部と肩部にロクロケズリを行ったのち、軽くロクロナデを施し、外側に自然縫がかかる。23は全面にロクロナデを施し、縁端は丸みを帯びた三角である。

これらの蓋の内面の調整は、摩滅のため不明の20を除いてすべてロクロナデである。

10～23はいずれも9世紀代のものと考えられる。

なお、口径が計測できたものは、掲載しなかったものを含めて26点で、11cmのものが1点、12cmのものが6点、13cmのものが7点、14cmのものが5点、16cmのものが1点、17cmのものが1点である。

杯（第6図24～33・第7図34～51）

第6図24～33は杯Aである。32は黒褐色土層内の攪乱からの出土、その他は遺物包含層からの出土である。

24～28・32は底部に回転ヘラ切り後ナデを施し、体部内外面はロクロナデを施す。見込みはロクロナデで、28は中央にもナデを施す。29・30は底部にロクロケズリを施す。31は焼成が軟質で摩滅が著しいため調整は不明。33も摩滅しているが、底部には回転ヘラ切り、体部内外面にはロクロナデの痕跡がみられる。

いずれも9世紀代のものと考えられる。

口径が計測できた破片は10点で、11cmのものが2点、12cmのものが5点、13cmのものが2点、14cmのものが1点である。

第7図34～39は杯口縁部破片で、34～38は遺物包含層からの出土、39は試掘時の出土である。

全個体、内面・外面ともにロクロナデを施し、35・38は体部に沈線が入る。

34・38は上末釜谷3号窯＝9世紀第4四半期、35は古沢3号窯＝9世紀第4四半期、36・37は上末釜谷4号窯＝9世紀第3四半期、39は上末釜谷1号窯＝9世紀第1四半期のものと考えられる。

口径が計測できた破片は21点で、12cmのものが5点、13cmのものが7点、14cmのものが5点、15cmのものが4点である。

第7図40～51は杯Bで、40は試掘時の出土、その他は遺物包含層からの出土である。

高台はすべて貼り付けである。高台端面の傾斜は、44・48・50・51が内傾で、その他は水平である。体部は内面・外面ともロクロナデである。底部は41・49が回転ヘラ切り後、ロクロナデとナデを併用。その他はロクロナデである。

40は古沢4号窯＝8世紀～9世紀初め、42は上末窯谷1号窯＝9世紀第1四半期、45は上末窯谷1号窯＝8世紀第4四半期～9世紀第1四半期のものと考えられる。41・43・46は9世紀前半のものである。

口径が計測できた破片は5点で、12cmのものが3点、14cmのものが1点、16cmのものが1点である。

碗（第8図52・53）

52は試掘時の出土、53は遺物包含層からの出土である。

両者ともに口径は15cmで、内外面ともロクロナデを施す。53は外面の口縁部下に粘土紐の痕がのこる。上末釜谷3号窯第3次操業＝10世紀第1四半期のものと考えられる。

壺（第8図54・55）

ともに遺物包含層からの出土である。

54は壺の肩部である。内外面ともにロクロナデを施し、胸部との境に沈線がはいる。小杉流団No16遺跡1号窯＝8世紀前半のものと考えられる。

55は壺の頸部外面と体部内面にロクロナデを施す。頸部内面と体部外面には自然軸がかかっているため調整などは不明である。

甕（第8図56～63）

57は建物-01・P4からの出土、62は試掘時の出土、その他は遺物包含層からの出土である。

56は口縁端部が外傾し、外側へひきだされて肥厚する。頸部には内外面にロクロナデを施し、体部外面には3cmあたり8条の格子状叩き目、内面には同心円紋を施す。9世紀後半のものである可能性が高い。

57は体部破片で、外面には3cmあたり5～6本の格子状叩き目、内面には同心円紋を施す。8世紀以降外面に格子状叩き目が出現し、9～10世紀の上末窯では格子状叩き目はほとんど見られないことから、57は8世紀代のものと考えられる。

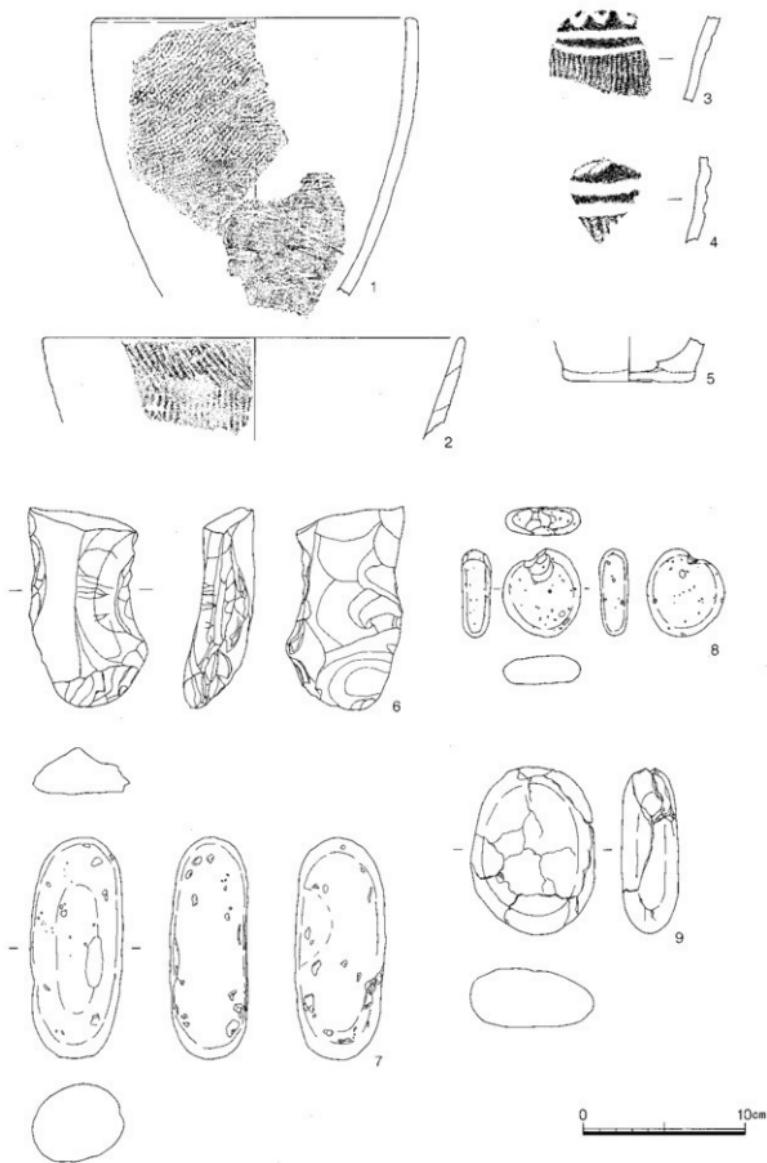
58は体部破片で、外面には3cmあたり10条の格子状叩き目を施した後カキメ、内面には同心円紋を施す。

59は底部破片で、内面の体部との境に指でナデつけたような痕が残る。

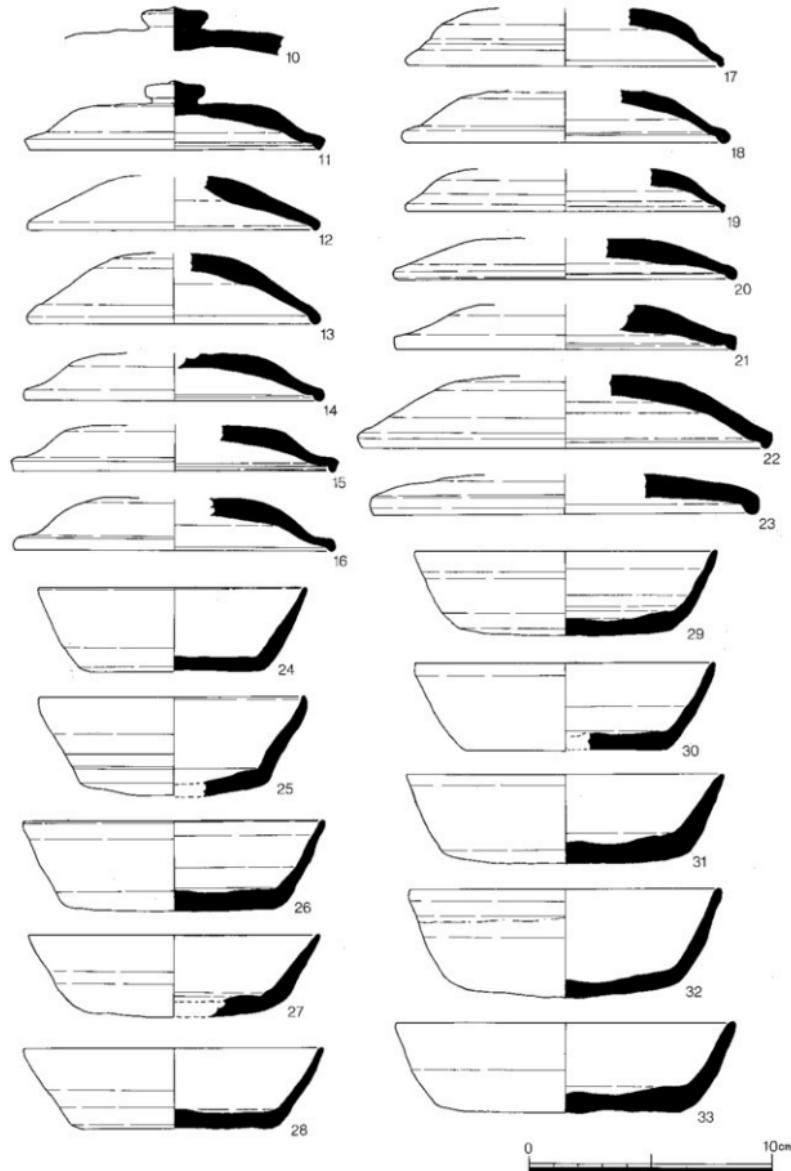
60は口縁部破片で、端部はやや外傾し、外面に肥厚する。外面に凸帯、内面に沈線を施す。8世紀後半のものと考えられる。

61は頸部から肩部にかけての破片である。頸部外面には格子状叩き目を施した後、ロクロナデを施し、その上に波状紋を巡らす。内面にはロクロナデを施す。肩部に自然軸がかかっている。

62・63は体部破片で、62は3cmあたり7条の格子状叩き目、63は8条の平行叩きの後カキメを施す。ともに内面は同心円紋を施す。62は格子状叩き目を持つため、8世紀代のものと考えられる。



第5図 遺物実測図



第6図 遺物実測図

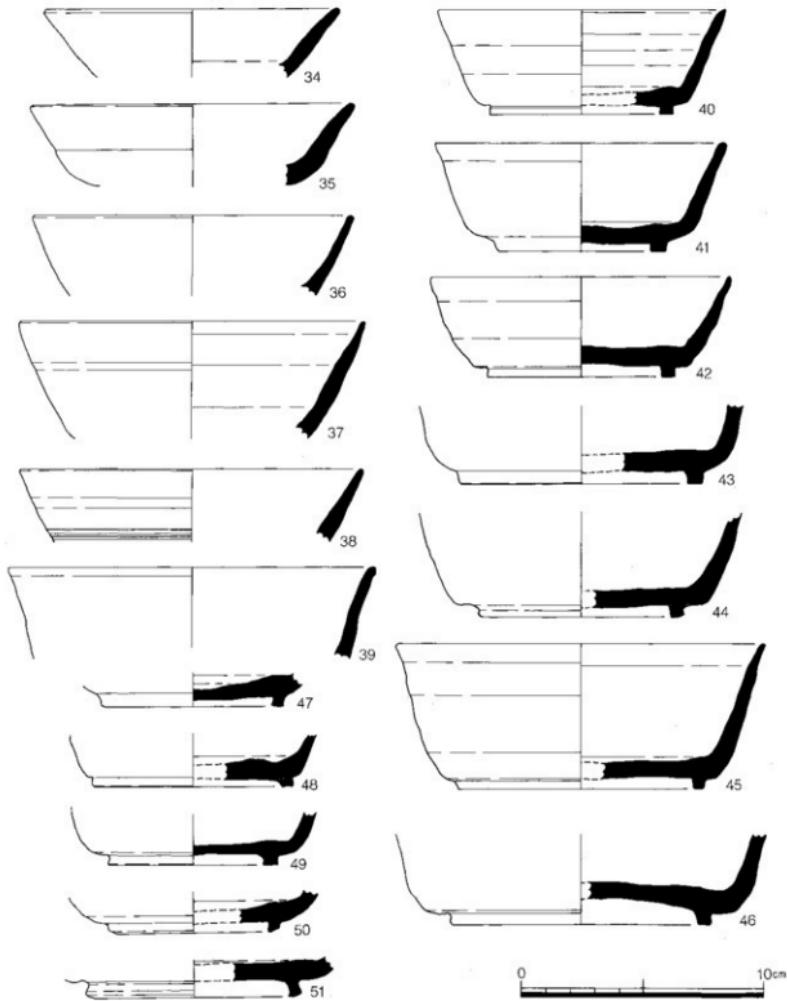
土師器（第9図）

杯・高杯・甕・鍋がある。

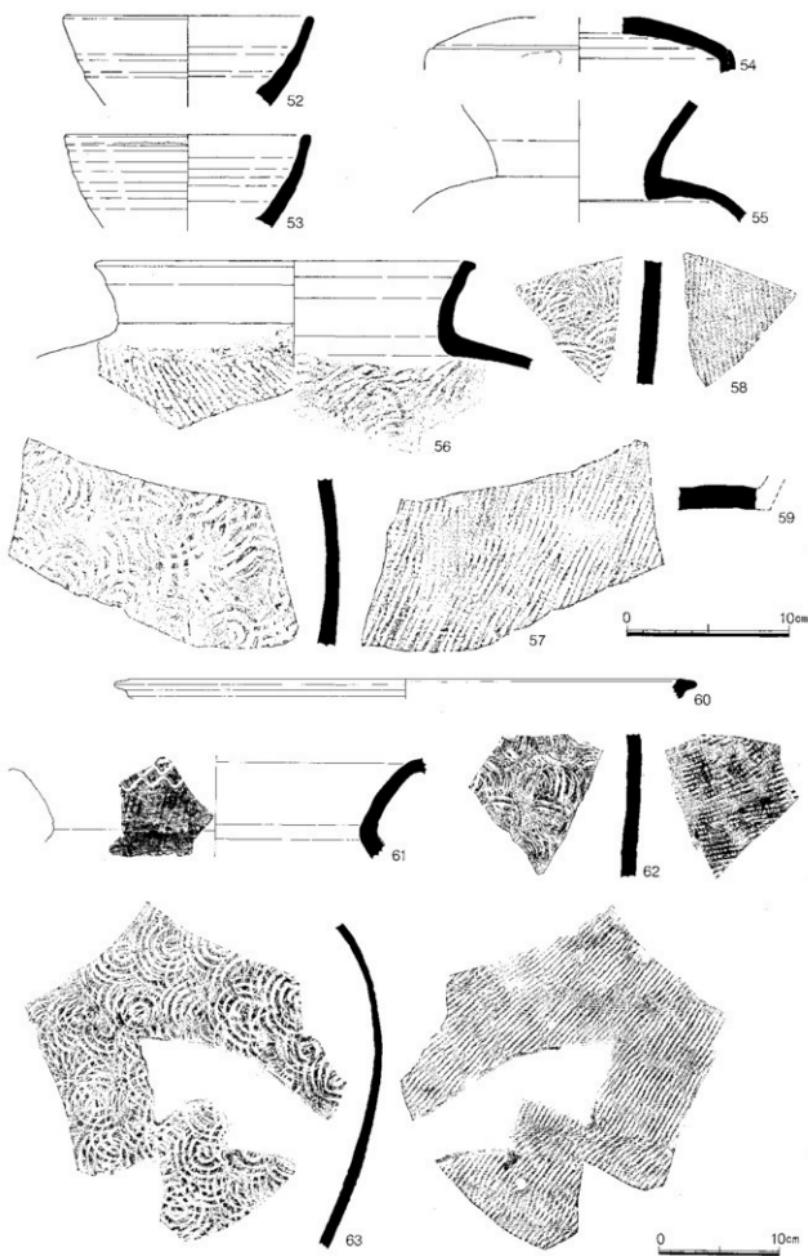
杯（第9図64）

遺物包含層からの出土である。

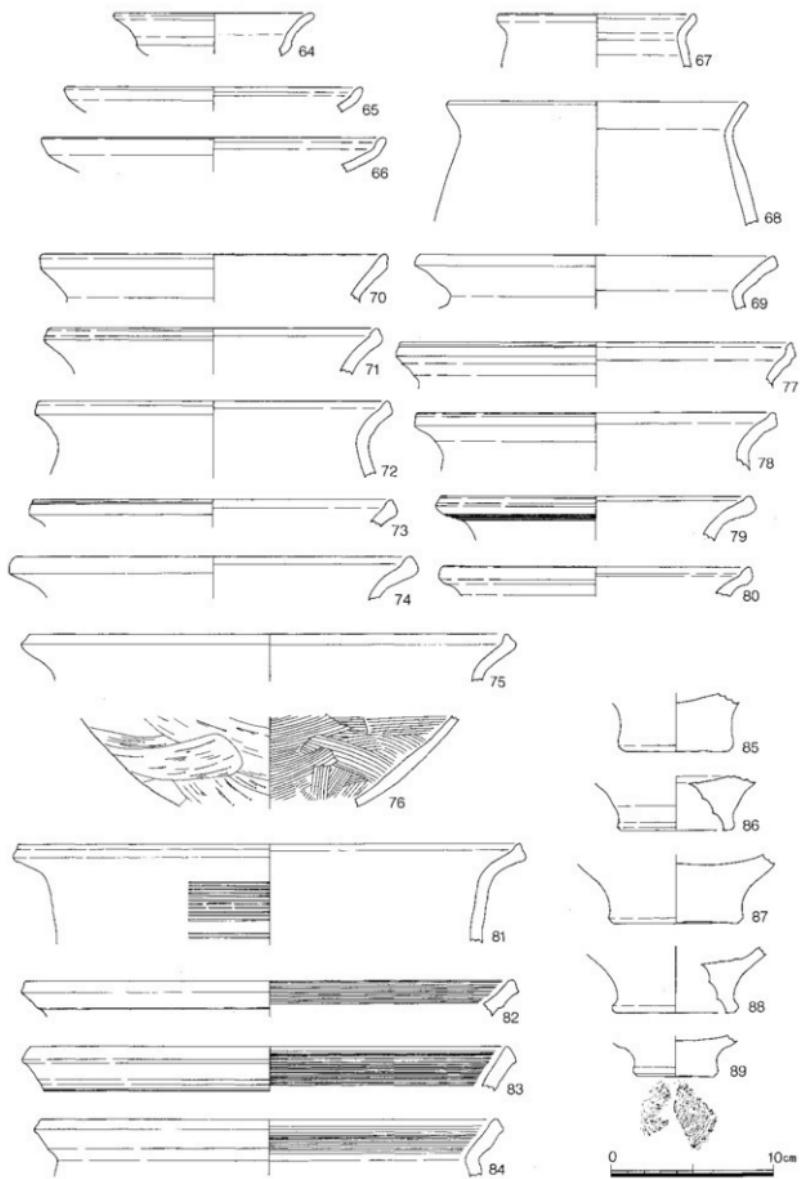
口縁部が外反する有段丸底の杯で、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。在地生産の東北系の杯の可能性が高く、7世紀代のものと考えられる。



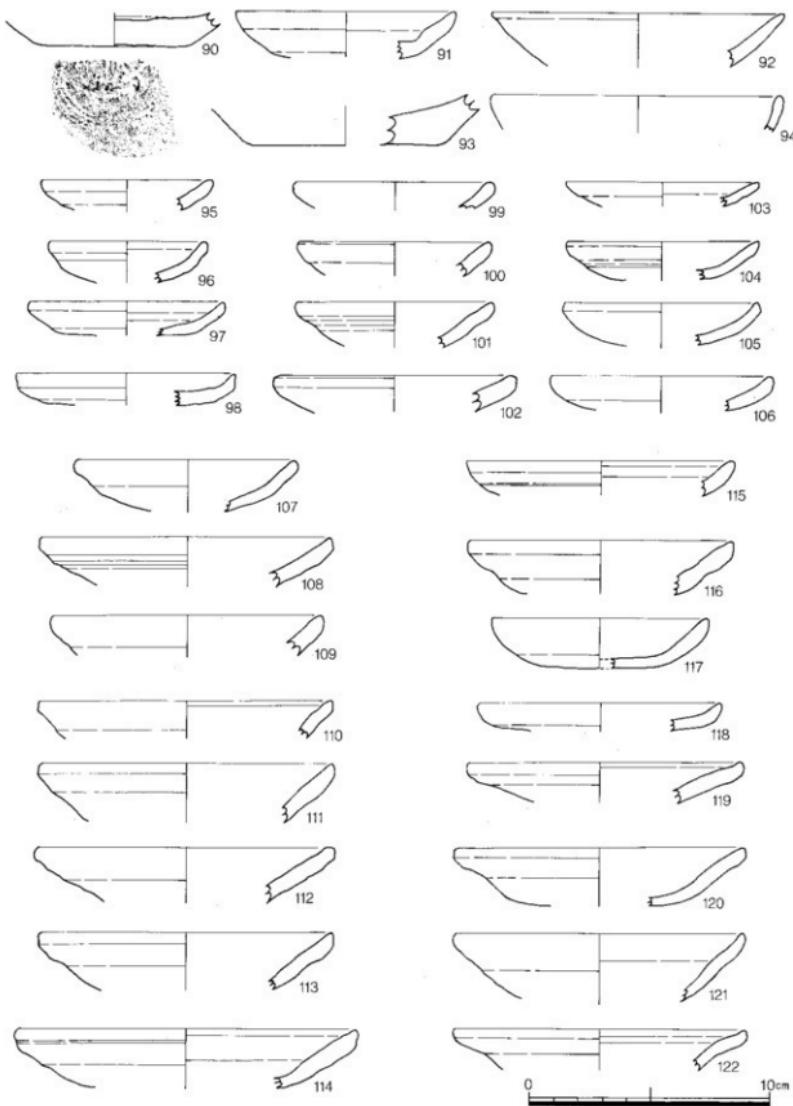
第9図 遺物実測図



第8図 遺物実測図 57. 建物-01・P4



第9図 遺物実測図



第10図 遺物実測図 106. 建物-02・P4

高杯（第9図65・66）

65は遺物包含層からの出土、66は試掘時の出土で、同一個体の可能性がある。

須恵器系の成形技術を用いて作った赤彩の高杯である。7～8世紀代のものと考えられる。

甕（第9図67～80）

76のみ底部に近い体部破片で、その他は口縁部あるいは口縁部を含む体部破片である。すべて遺物包含層からの出土である。

67・68は器壁が薄く、短く外傾する口縁端部を丸くおさめる。69は直線的に外傾する口縁の端部を面取りする。70は直線的に外傾する口縁を上方に引き上げて、端部を丸くおさめる。71～74は外傾する口縁を上方に引き上げて面取りし、端部はやや肥厚する。内面には段がつく。75は外傾する口縁を上方に引き上げて面取りする。強いナデにより面取りした部分が凹み、内面に明瞭な段がつく。77は口縁端部を上方に引き上げて面取りし、やや肥厚する。78は外傾する口縁を上方に引き上げて面取りする。外面にはカキメを施す。79は口縁端部を上方に引き上げて丸くおさめる。80は口縁端部を上方に引き上げて面取りし、端部は角を持つ。76は底部近くの破片である。外面にはヘラケズリ、内面にはハケメを施す。

67～74・76～80は8世紀第2四半期から第3四半期のもの、75は8世紀末のものと考えられる。

鍋（第9図81～84）

81は試掘時の出土、82～84は遺物包含層からの出土である。

81は外傾する口縁を上方に引き上げて面取りする。強いナデにより面取りした部分が凹み、内面に明瞭な段がつく。82～84は口縁端部を面取りし、内面にカキメを施す。いずれも8世紀後半のものと考えられる。

(3)中世以降の遺物（第9図85～14図）

土師器、青磁・珠洲焼・八尾焼・瓦質土器・瀬戸美濃焼・越中瀬戸焼などがある。

土師器（第9図85～89・第10図）

第10図106は建物-02・P4からの出土、第9図88、第10図117は試掘時の出土、その他は遺物包含層からの出土である。

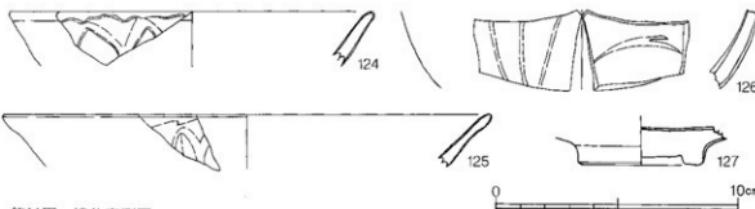
柱状高台（第9図85～89）

85～89は柱状高台の破片である。焼成は軟質で、摩滅により表面の調整は不明である。89の底部には回転糸切り痕が残る。すべて12世紀代のものと考えられる。

皿（第10図90～122）

第10図90～94はロクロ成形の皿である。

90・93は底部破片で、90の底部には回転糸切り痕が残る。10～12世紀代のものと考えられる。



第11図 遺物実測図

91は口縁部破片で、12世紀後半のものと考えられる。

92・94は口縁部破片である。92はわずかに内彎した口縁部を端部で外反させて丸くおさめるもので、口縁端部内面にタールが付着している。94は口縁部がやや内彎しつつ立ち上がるるもので、碗の可能性がある。92・94とも胎土が磁器質であるため、近世のものと考えられる。

第10図95～122は手捏ねの皿である。

全て口縁部に一段ナデを施す。98・99は口縁部内外面にタールが付着しており、灯明皿と考えられる。

96・97・99・102・103は12～13世紀、105・109・112・114は13世紀代、117・118は14世紀代、120・121は1500年前後、112は15～16世紀、106は14世紀以前のものと考えられ、これら以外は全て12世紀代のものと考えられる。

青磁（第11図124～127）

龍泉窯系の碗の破片で、すべて遺物包含層からの出土である。

124はやや外反気味の端部をもつ口縁部破片で、外面に蓮弁文を施す。釉は淡緑色で不透明、細かい貫入が入る。

125は口縁部の破片で、やや外反気味の体部外面に鎧蓮弁文を施す。釉は青緑色で厚みがあり、気泡がみられる。127はやや厚手の底部破片で、見込文様はみられない。釉は透明なオリーブ色で、気泡と貫入がみられる。

いずれも13～14世紀代のものと考えられる。

珠洲焼（第12図128～134・第13図136～139）

第12図134、第13図139は穴4からの出土、その他は遺物包含層からの出土である。

壺・片口鉢・擂鉢がある。

壺（第12図129）

壺の体部破片で、外面に平行叩き痕、内面に当て具痕が残る。外面の平行叩き条数は3cmあたり10条で、Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられる。

片口鉢（第12図128）

体部は内彎しつつ立ち上がり、口縁端部に弱いナデにより面を絞る。底部には静止糸切り痕が残る。Ⅰ期のものと考えられる。

擂鉢（第12図130～134・第13図136～139）

第12図130・132は口縁が外傾して面を取る。オロシメ1単位の条数はともに7条。第12図134、第13図136は外傾して面を取り、口縁端部の内面をわずかにひきだす。ともに条数は20条である。第12図131は口縁端部に水平に面を取り、外方向にひきだす。第12図133は口縁部下の外面を強いナデによって凹ませる。第13図137～139は口縁部を欠く破片で、オロシメの条数は137が9条、138が10条、139が13ないし14条である。

130・137はⅡ期、131・134はⅢ期、132・133・136・138はⅡ期～Ⅲ期のものと考えられる。

八尾焼（第13図140～144）

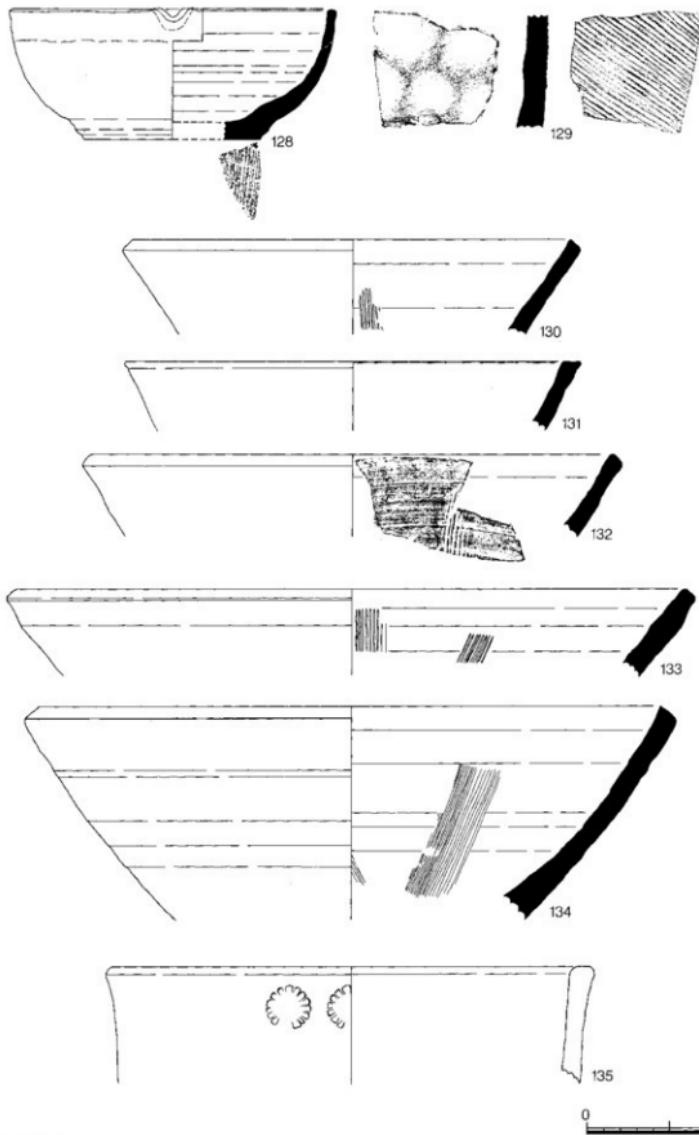
第13図143は穴4からの出土、その他は遺物包含層からの出土である。

鉢・片口鉢・壺がある。

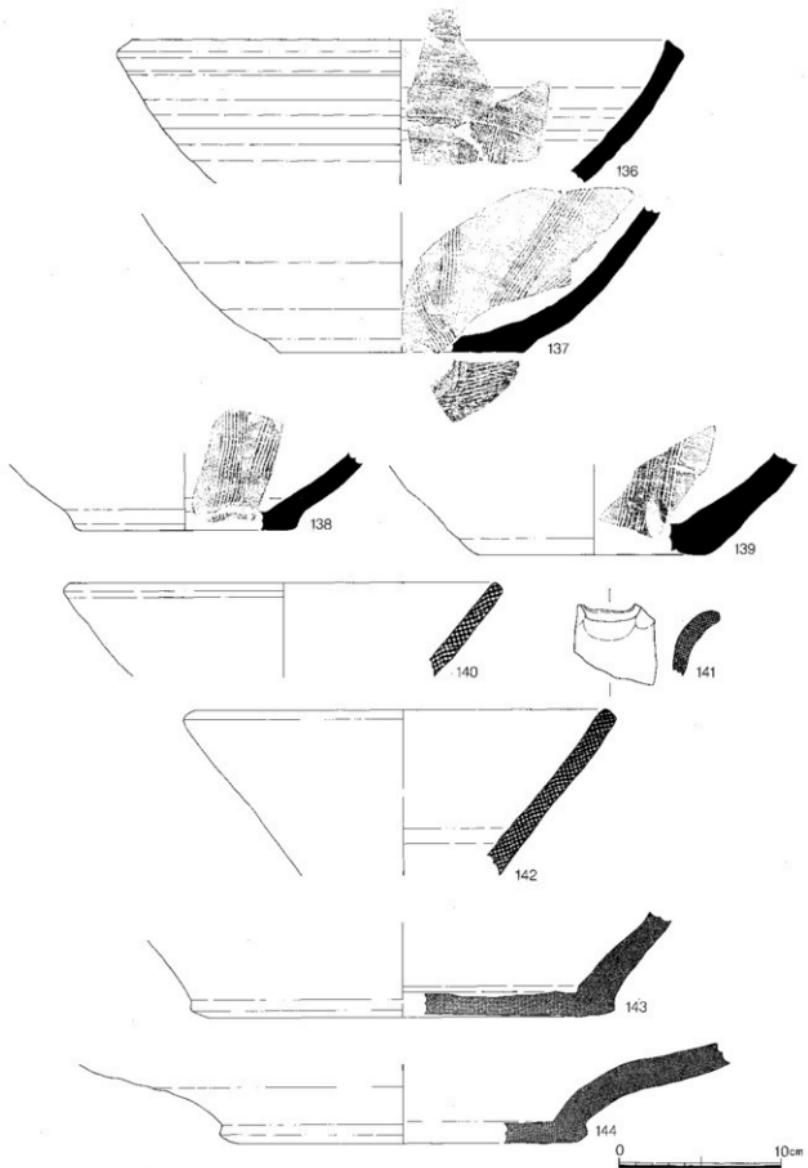
140・142は無文でオロシメを施さない鉢である。体部はやや直線的に立ち上がる。端部は外傾し、弱いナデにより面を取る。13世紀代のものと考えられる。

141は片口鉢口縁部である。142と同一個体の可能性がある。

143・144は壺底部である。



第12図 遺物実測図 134 穴4



第13図 遺物実測図 139・143 穴4

瓦質土器（第12図135）

遺物包含層からの出土である。

口縁部がやや外反氣味に立ち上がった火鉢で、口縁部直下の外面に16弁の菊花文を押印する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質で、摩滅が激しく内外面の調整は不明である。色調は淡黄灰色で、部分的に赤みを帯びる。15世紀末から16世紀のものと考えられる。

瀬戸美濃（第14図148）

遺物包含層からの出土である。

平碗の底部破片で、内面は灰釉を施し、外面はロクロケズリを施す。時期は不明。

越中瀬戸（第14図145～147・149～152）

第14図145・150・151・152は試掘時の出土、その他は遺物包含層からの出土である。

145～147は碗である。直線的に立ち上がる口縁部を持ち、体部下半は丸みを帯びる。鉄釉を施し、胎土は灰白色系である。17世紀代のものと考えられる。

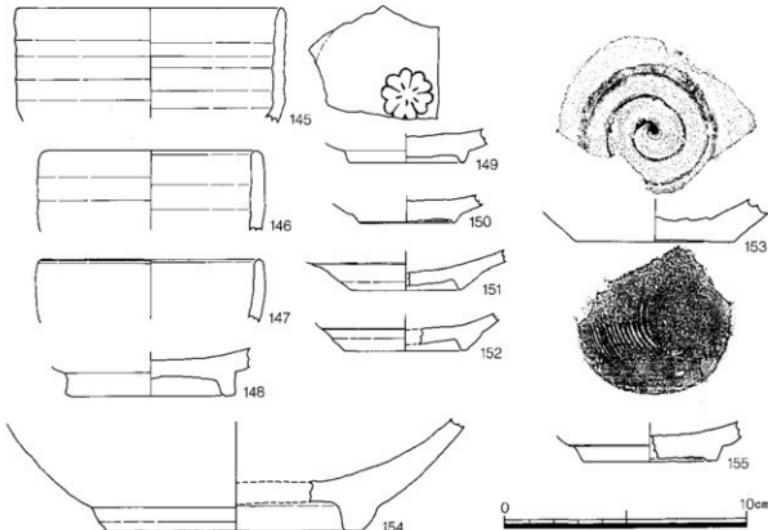
149・150は内禿皿の底部破片である。149は見込みに印花文が施される。底部調整は回転ヘラケズリ。17世紀代のものと考えられる。

151・152は内禿皿の底部破片で、削り込み高台である。内面はロクロナデを施し、外面の体部下半と底部にロクロケズリを施す。

その他の遺物（第153～155）

155は試掘時の出土、その他は遺物包含層からの出土である。

153は壺形態のもの、154は鉢の底部破片、155の器種は不明である。



第14図 遺物実測図

IV 調査成果

本年度の調査で得られた新知見は以下の通りである。

1. 遺跡は、古代及び中世の集落跡と考えられる。
2. 調査区は、南北に流れる2本の流路により3地区に分割され、このうち西側と中央の地区から、掘立柱建物各1棟を検出した。
- 西側地区的建物-01は、3間×2間の規模で、時期は柱穴出土遺物から8世紀代に属すると考えられる。
- 中央地区的建物-02は、2間×2間の規模で、時期は柱穴出土遺物から中世初期と推定する。なお、いずれの柱穴も浅く小さいことから、この建物の存続期間はごく短かったものと考えられる。
- 縄文時代の遺物は、ごく少量であり、全て遺物包含層からの出土である。晩期の御経塚式期から中屋式期に盛期があった可能性は考えられるが、集落の存在等については周辺の調査を待ちたい。
- 古代の遺物は、遺構内から出土したものは少なく、ほとんどが遺物包含層からの出土である。時期は7世紀代から10世紀前半までのものが、まんべんなく出土している。
 - 土師器は、7世紀代に属する可能性があるものは少量で、8世紀の第2～第3四半期のものが主流を占める。
 - 須恵器は、8世紀代のものは他地域からの搬入品が主体であるが、在地の立山町上末窯が操業を始める9世紀以降は、同窯産のものが大部分を占める。
- 中・近世の遺物は、全て遺物包含層からの出土で、12～16世紀代までのものがあるが、12～13世紀代のものが主流を占める。土師器皿・青磁・珠洲焼・八尾焼・瓦質土器・瀬戸美濃・越中瀬戸などがある。
- 遺跡の所在する利田地区は、「東大寺領大藏莊」に比定されている浦田地区に隣接しており、正倉院に保存されている同莊の墾田図に名前の見える「川枯郷」をこのあたりに比定する考えは古くよりあった。
 - この「川枯郷」の存続期間は明確ではないが、墾田図の書かれた8世紀に存在したことは確かであり、今回の調査で新たに所在の確認された古代集落が「川枯郷」またはその周辺の集落である可能性は否定できない。
 - ただし、今回は800m²という狭い範囲の調査であり、また周辺の同時代遺跡の調査もほとんど行われていない為、これ以上の推論は不可能と考える。今後の調査の進展を待ちたい。（三鶴）

参考文献

- イ 石川県埋蔵文化財センター 1986 「漆町遺跡Ⅰ」
石川県埋蔵文化財センター 1989 「金沢米泉遺跡」
- ウ 内堀信雄 1988 「須恵器壺類に見られる叩き目文について」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
- カ 金沢市・金沢市教育委員会 1996 「金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ」
金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合 1991 「金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ」
金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査教育委員会・金沢市新保本町第1土地区画整理組合 1983
『金沢市新保本町チカモリ遺跡』
- 上市町教育委員会 1984 「弓庄城跡－第4次緊急発掘調査概要－」
- ス 鈴木道之助 1991 『石器入門事典 繩文』 柏書房
- タ 立山町教育委員会 1977 「立山町史」上巻
立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要」
立山町教育委員会 1988 「浦田遺跡－第2次発掘調査報告書－」
立山町教育委員会 1990 「辻遺跡－第2次発掘調査報告書－」
立山町教育委員会 1991 「辻遺跡－第3次発掘調査報告書－」
立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1988 『立山町埋蔵文化財分布調査報告書』Ⅲ, 立山町文化財調査報告書第5冊
立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1989 『立山町埋蔵文化財分布調査報告書』Ⅳ, 立山町文化財調査報告書第8冊
- テ 出越茂和 1995 「Ⅲ北陸」 「須恵器集成図録」 雄山閣出版㈱
- ト 富山県教育委員会 1982 「小杉流通業務団地内遺跡群－第3・4次緊急発掘調査概要－」
富山県教育委員会 1984 「小杉流通業務団地内遺跡群－第6次緊急発掘調査概要－」
富山県埋蔵文化財センター 1990 「栗山椿原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡」
富山県埋蔵文化財センター 1990 「北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編5－堺A遺跡石器編」
富山県埋蔵文化財センター 1991 「南中田D遺跡発掘調査報告書」
富山県埋蔵文化財センター 1993 「任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡」
富山県埋蔵文化財センター 1994 「吉倉B遺跡」
富山大学人文学部考古学研究室 1989 「越中上末窯」
- ナ 永峯光一 1981 「中部・北陸地方」 『縄文土器大成4』 講談社
- ニ 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994 『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』
- ノ 能都町教育委員会・真鶴遺跡発掘調査団 1986 「真鶴遺跡」
- フ 藤沼邦彦 1981 「東北地方」 『縄文土器大成4』 講談社





図版 3

1. 調査区全景
(東から)



2. 調査区全景
(南から)



3. 建物-01
(南から)



4. 柱穴 4
(南から)





11



24



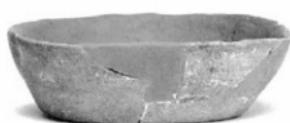
25



26



27



28



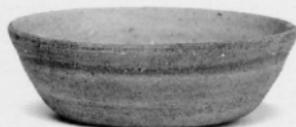
29



30



31



32



33



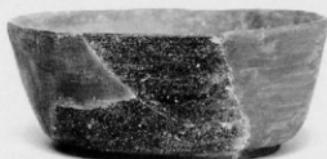
40



41



42



45

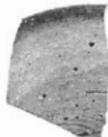
図版 5 遺物写真



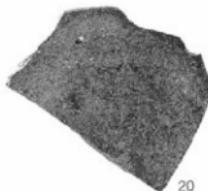
図版 6 遺物写真



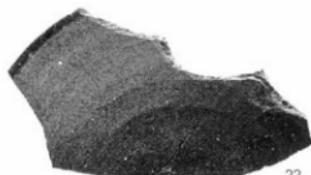
19



21



20



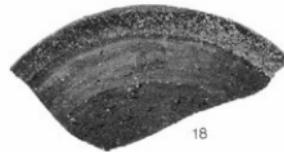
22



10



14



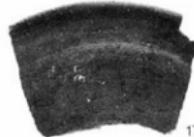
18



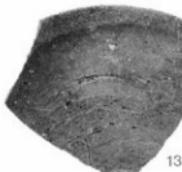
16



23



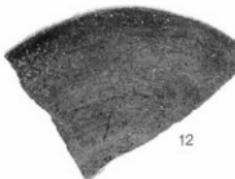
17



13

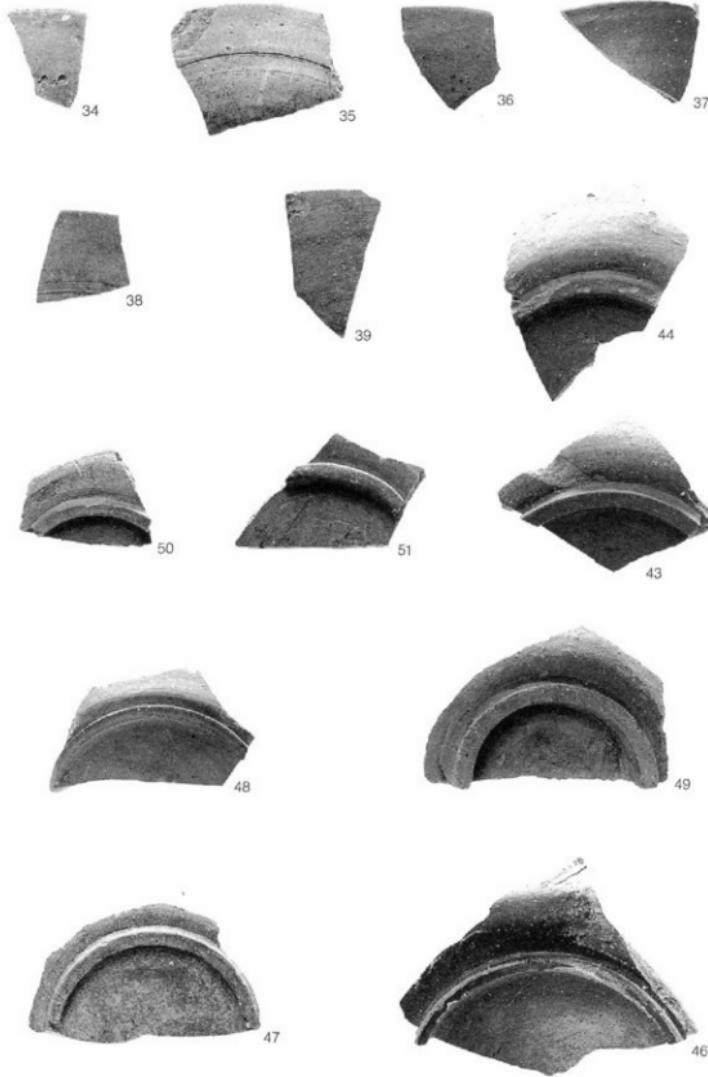


15

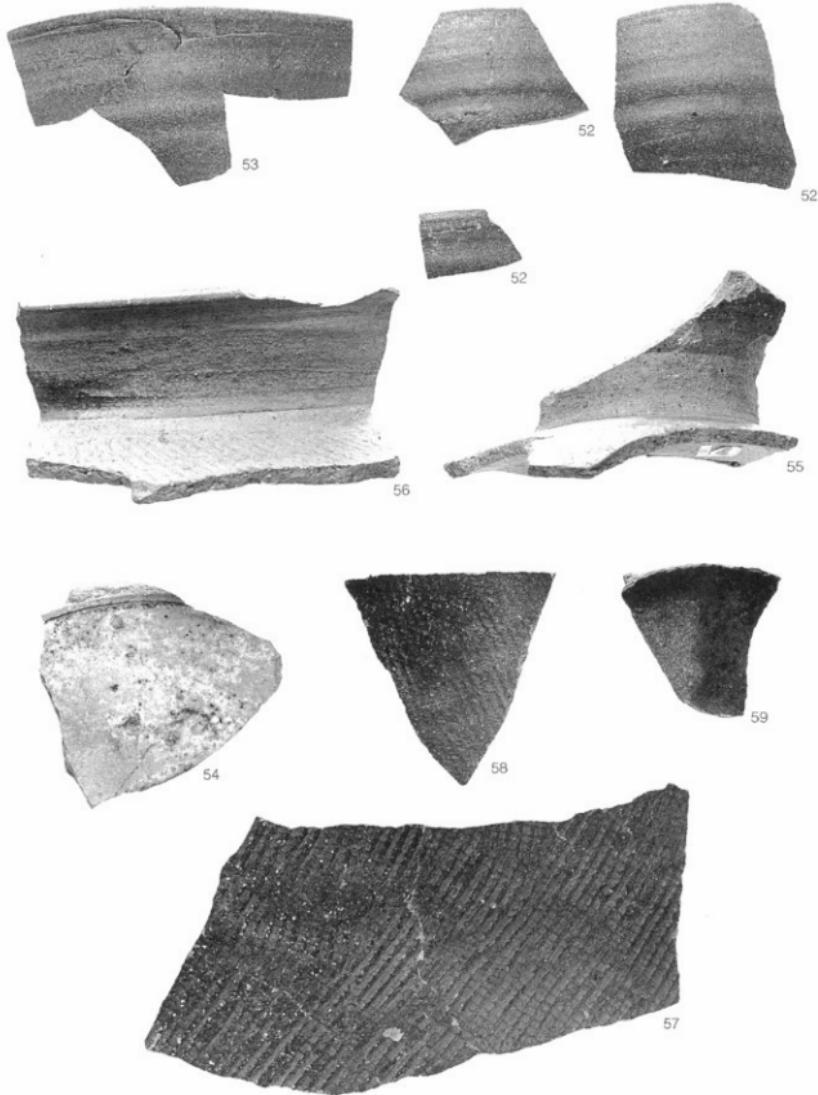


12

図版 7 遺物写真



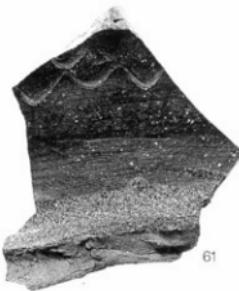
図版8 遺物写真



図版9 遺物写真 57. 建物-01・P₁



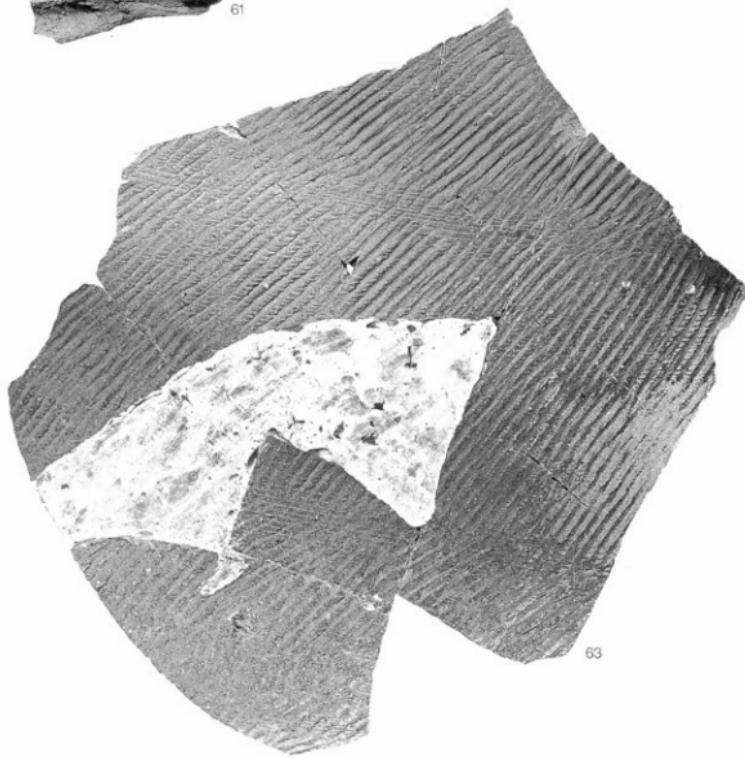
60



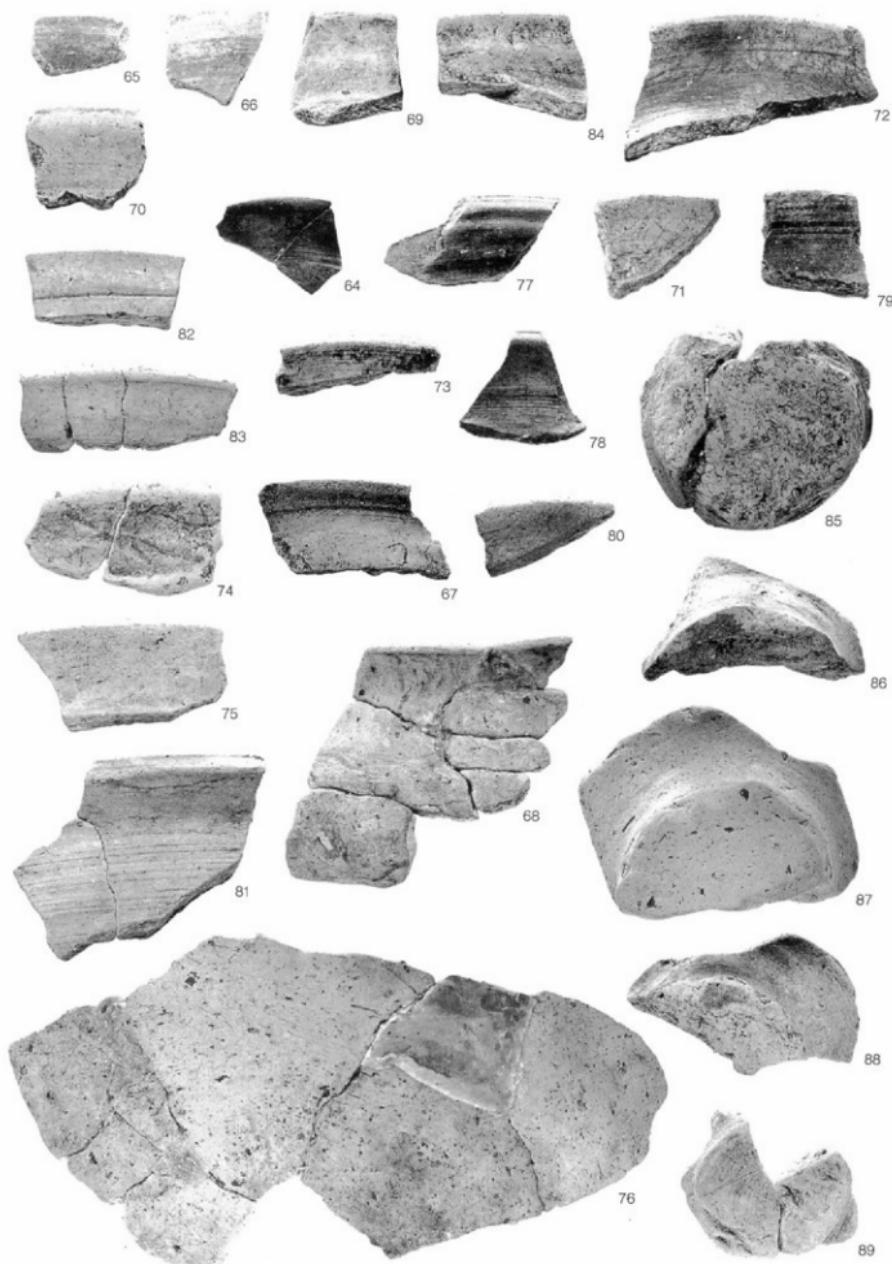
61



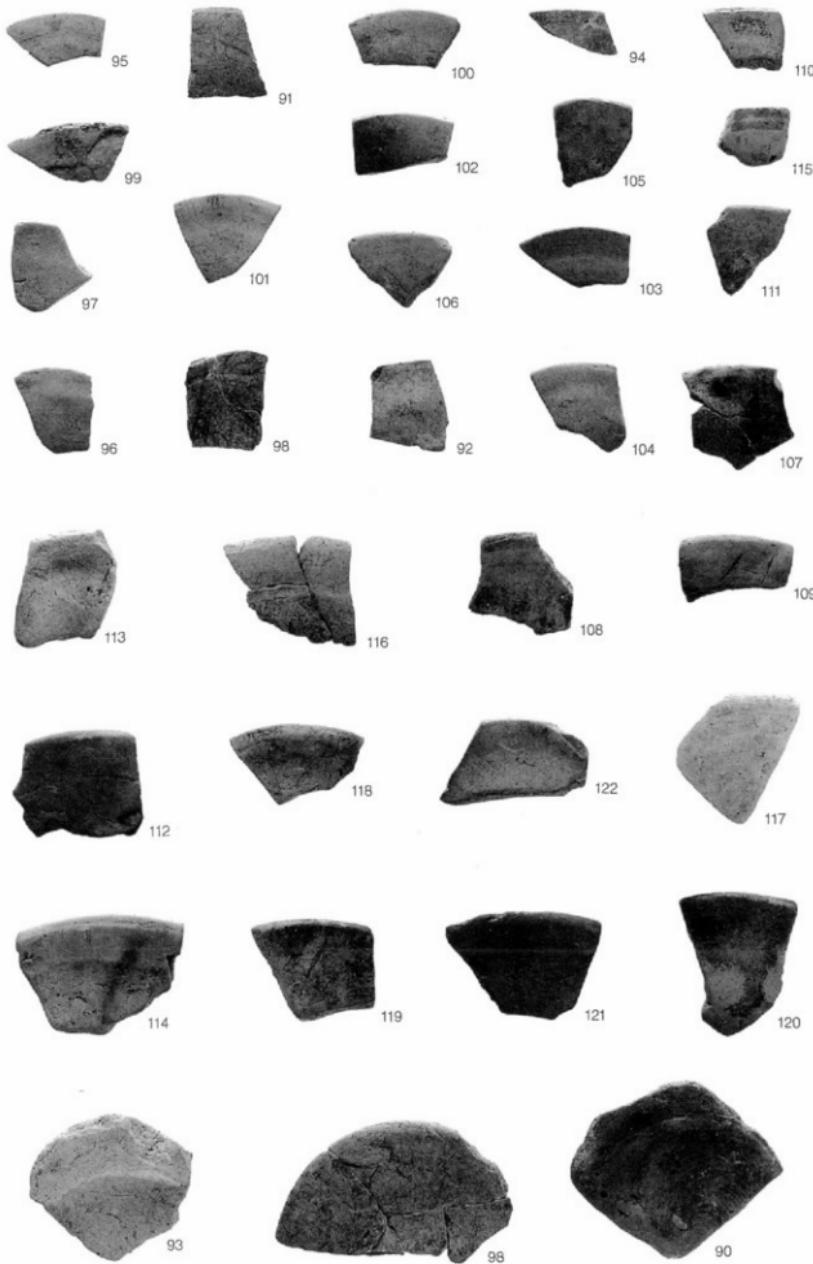
62



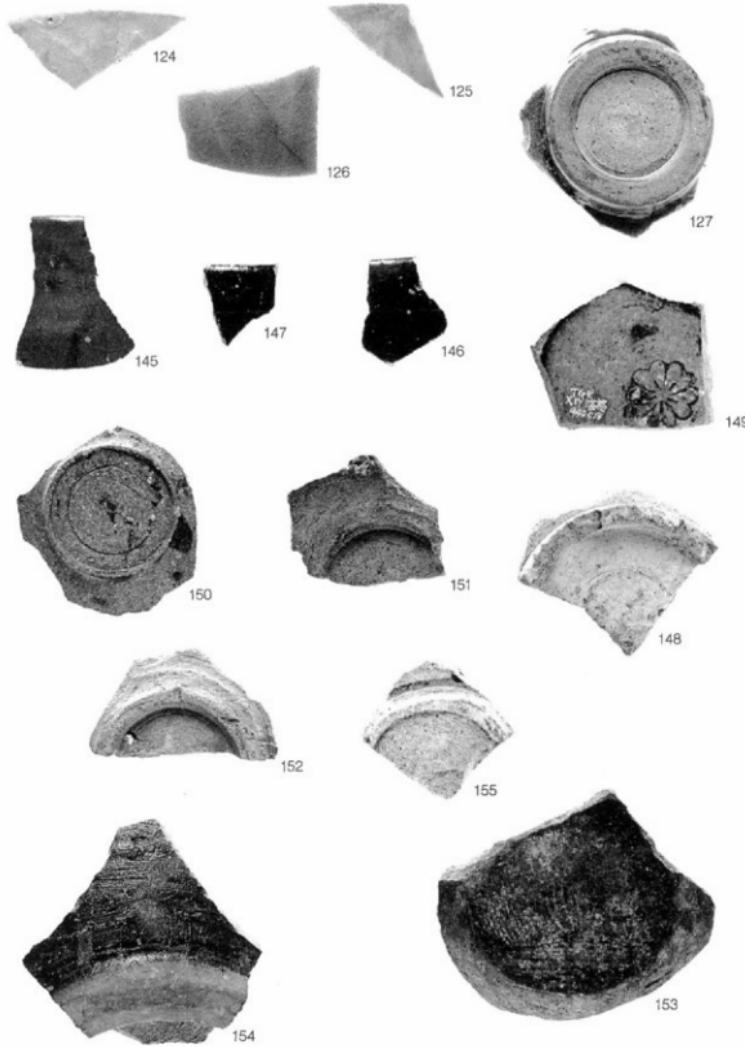
63



図版11 遺物写真



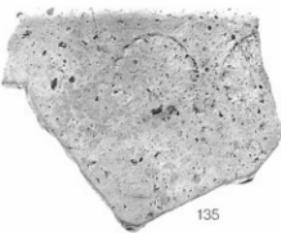
図版12 遺物写真 106. 建物-02・P₄



図版13 遺物写真



128



135



129



130



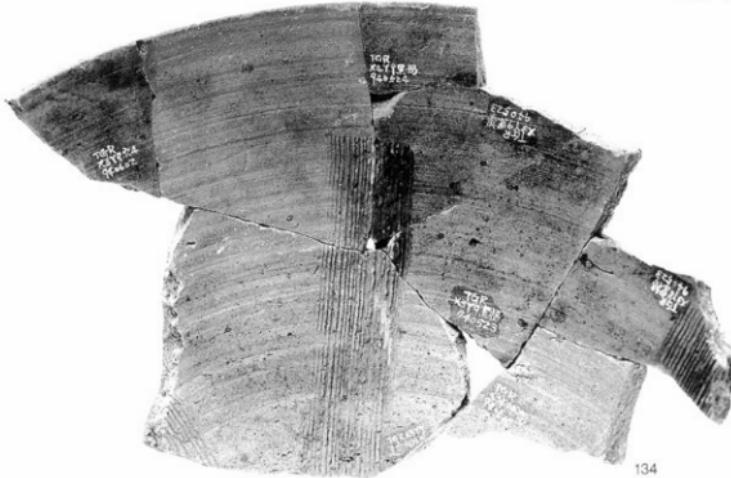
131



132



133



134

図版14 遺物写真 134. 穴4



図版15 遺物写真 139・143. 穴4

ふりがな	ごろうまるいせき						
書名	五郎丸遺跡						
副書名	立山町第2五郎丸企業団地造成事業に伴う発掘調査						
編集者名	三鍋秀典、柴垣智子						
編集機関	立山町教育委員会						
所在地	〒930-02 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
発行機関	立山町教育委員会						
所在地発行	〒930-02 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
年月日	西暦1995年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
五郎丸	富山県中新川郡 立山町五郎丸	323	012	36° 40' 55"	137° 18' 13" ~ 19940513 19940630	800	企業団地造成 事業に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
五郎丸	集落跡	縄文・古代・中世	掘立柱建物・穴・流路	縄文土器・石器・土師器・須恵器 ・土師質小皿			

五郎丸遺跡

立山町第2五郎丸
企業団地造成事業に伴う発掘調査

立山町文化財調査報告書第24冊

発行日 平成7年3月31日
編集・発行 立山町教育委員会
印刷 株式会社 チューエツ

